

第4回 戦後60年、青春の記憶 いまだ鮮明

朝鮮人強制動員被害のはなし

太平洋戦争前の戦前から戦後にかけて、忠別川流域の東川町内であったといわれる朝鮮人強制労働の実態解明調査を行っている「江卸発電所・忠別川遊水池・朝鮮人強制連行・動員の歴史を掘る会」（近藤伸生代表）は昨年10月、掘る会メンバー6人と、東川町から企画総務課長も同行して慶尚南道に調査へ行きました。今回は釜山広域市に住むお二人の話。

金小萬(キム・ソマン)さんの話



1921
(大正10)
年生まれ、
89歳。日本
に来たのは
23歳。韓国
では農業に
従事。
結婚はし

ておらず強制徴用された。地域に隊長がいて、15人が強制徴用された。

釜山へ行くときたくさん集まっていてキムの人、ハマンの人がいて全部で70人いた。

「徴用兵」と聞いていたのだが、実際に現地へ着いてみると、たこ部屋での労働だった。自分は「大塚組」であった。

労働は日の出から夕方(日が暮れる)まで。食事以外の時間は毎日休みなく働かされ、土や砂利を載せたトロッコ押しが主な仕事だった。

周りに町はなかった。田舎だった。(はつきりと「ヒガシアサヒカワ」と覚えていた)。

遊水池工事で良く働いた人が、後に海の近くのトンネル工事に行かされた(列車で1日かからないところで、落部が留

萌と思われる)。トンネル掘りの時に終戦。そして東旭川へ戻った。

食事はいつも大豆かすと塩味のじゃが芋だけで、どんな人もここへ来ると体はやせた(麴を作る大豆と雑穀を混ぜ煮したようなもの)。米はでなかった。時に数粒混じっているときがあるくらい。賃金は一切なかった。

衛生状態はあまり良くなく、布団がとでも臭くてシラミがいた。毎晩シラミとりをしてから就寝した。

病気を流行させないために風呂には毎晩入ることができた。病院へは行ったことがない。帰りに何人いたかはわからない。亡くなった人もいるし、途中で別れた人もいる。自分は地域で一番身体が頑丈だったから生き延びることができた。

李秀根(イ・スグン)さんの話

1921(大正10)年生まれ、89歳。当時は農業に従事していたが、お金もないし親戚もなくぶらぶらしていたら、23歳の時「捕まって」行くことになった。同じ村の金小萬氏と一緒に行き、一緒に帰ってきた。

北海道の現場に着いたら倉庫のような小屋に入れられ外から鍵で閉められた。

「なんという場所かわかりますか? わからない。」

「東川ではないですか?」

「それを聞き「ヒガシカワ」という地名を思い出した。」

労働はもっこ担ぎをさせられ、時間は日の出から日の入りまでトロッコ押しをした。逃亡して捕まったら、親方が殴り、次に下の幹部が殴る。親方より強く殴らないとその下の幹部が殴られるので強く殴る。失神したら、バケツの水をかけて起こし、また殴る。友人が逃げた時もそうなり、半殺しにされた。

食事は幹部がおいしいものを全部食べ、残りは私たちが米を見たことがない。幹部は座って食べるが、私たちは立ったまま食べて、大豆のかす汁と塩じゃが芋が主食であった。



飯場の天井は弁当の木のような薄い木だったが、釘が突き抜けるように刺さっていた(逃げる可能性がある)

ので、逃げようとして頭に釘が刺さりけがをした人がいた。

寝るときは逃亡防止のため禪(ふんどし)一枚にさせられた。冬でも同じ。朝起きると雪が頭の周りに積もっていた。

解放(1945(昭和20)年8月15日の終戦)は1週間くらい経ってから知った。(玉音放送は聞いたけど、解放ということは知らなかったから、仕事をしなくて良いとは分かんず、1週間働いた。中国人収容所の人たちは自由に鶏や牛を食べているのでおかしいと思った。

「その牛はどこから手に入れた?」と聞くと「回りの村からとってくればいい」と言われたので私たちがもそのようにやった。牛1頭を300人くらいで食べた。その日本人は牛を奪われ、悲しそうにしていた。

給料はあったが、軍人慰労金という名目で引かれてほとんど残らなかった。日本政府や地崎組に対して望むことはありますか?

ない。言おうと思えば何日かかるかわからないし、口が痛くなるだけだ。

江卸発電所・忠別川遊水池・朝鮮人強制連行・動員の歴史を掘る会

代表 近藤伸生